

## 教育時評

## 母親と子どもと教師と

山崎 昌甫

私はいま三つの定期的にもたれている母親の学習会に参加している。この三つの学習会はそれぞれ違った地域の母親が、違ったテキスト、課題で話し合っているのだが、いずれも話題の中心や、話の落ちつくところは一つにしばられてしまう。母親のいい方では、子どもの担任の先生のことだし、私なりの見方をするなら、子どもをめぐる母親と教師の対立のことなのである。この対立感情は、毎年のように、五月のPTA総会前後から、六月にかけて激しくなっていく。この対立関係は、意図的につくられた条件と、そのような条件の下で「自然発生」的に生みだされたものが複雑にからみあっているように思われる。

母親は、一般に、自分の子どもを通して学校、学級をみる。できれば自分の子どものもつとも望ましい形で成長、発達の実

現を中心になつて学級や学校が運営されることを期待している、といつてもいいような状態がみられる。親の、あるいは家族が期待する理想的な子ども像がかなり明確になる。一方、教師たちは、たんならない方をすれば、子どもを、児童、生徒つまり学習集団としてよりも教育集団としてとらえる。子どもの個性やかくされた能力は、集団の中でこそそれとして発揮され、伸びていくものだ、という立場になつた。だから一歩誤ると、集団をトータルにとらえ、同質の量の集合として見がちになる。多数の平均的な子どもの中に、少数のときの良い子がいるのはいいとしても、手に負えない子どもがいることは、学習指導、学級経営の支障になるという考えに陥いることになる。

みちあふれている子どもたちが、はじめは形式的に作られた学級を、ゲイナミックな学習集団に創りかえているという事実を、ともすると忘れてしまっている。子どもかわいさのあまりに親にはこのような実態が視野の中にはいつてこず、強化された管理体制の中ゆえに教師はこの現実を素通りしてしまう。ともに不安と焦躁の中で子どもをおきざりにしている。子どもは、親子のつながりの中では良い子に、教師との関係では良い児童・生徒としてふるまわざるをえないのだ。形式的・制度的な学級は、そこにどういう性質のものであれ、学習の課題があれば学習集団へ発展する可能性はある。しかし学習する子どもを媒介にして、教師および教師集団、母親および地域の父母集団が、地域のそして日本の教育の発展のためにそれぞれ連帯しているのだから、学習集団は、ホンモノの学習集団にはなりえない。それぞれの親が、自分の子どもの成績を少しでも良くしようとして躍起になり、ひとりひとりの教師が、自分の社会的・経済的地位の向上をめざして学級の成績向上を競う限り、管理体制は自動的にその機能を末端にまで浸透させることができる。能力主義を基調とする教育政策は、このような条

件を手がかりとして、教師も父母も分断支配することができぬ。

たとえば、母親の学習会で「しつけ」の問題が出てくると話はずきることなく発展する、そして最後に「学校はなぜ、もつとしつけをしつかりやってくれないのか」という不満で終わる。母親たちの説明によると、「しつけは家庭でやるもの、学校は教育の場であって、しつけまでやっていたら教科書が終わらずにはできない」という教師の反響に出ない、勉強をやらせよ、まで、ということでおさめてしまう。しかし「これでいいのか」という疑問は解決されず、不満となつてうつつ積する。教師のほうも、近ごろの親はしつけもろくにできない、子どもにも勉強してもらうために、子どもをハレ物にさわるように振う。あれではロクな人間にならない」と親を批判する。「社内教育入門」という本の中で、「社会と労働との関係を家庭においてしつかり理解してない人たちが企業内にはいつてくるとしたら、企業内教育は家庭教育の肩代わりをしなければなりません。社会生活における市民としての行動のルールを義務教育で十分に習得してこない人たちがはいつてくるとしたら、企業内教育は、小学校、中学校の

肩代わりをしなければなりません……」と書いてある。このような教育の現状についての認識は、財界首脳を中心に、それに加担する学者によつて組織された日本経済調査協会の「新しい産業社会における人間形成」という書物の中にも現われている。そこでは、「生涯学習の立場は、学校教育なるものは家庭に続く第二の基礎的教育の場であつて、大学といえども、もはや昔日のような完成教育の場たりえなくなつていゝから家庭教育・学校教育・社会教育はそれぞれ役割を分担する一方、生涯教育の一環として企業もまた人間形成の場であるとの認識に立って、人間の主体性を確立し、創造性を開発し、志気性を高めるような、組織の人間化、をめざすべき」であるとして、企業内教育を頂点とし社会教育——学校教育——家庭教育を提言するのである。家庭や学校でやれないことは、やがて社会教育や企業内教育でやってくれるのだ、ということはこの二つの本で言っているのではないことは明らかだろう。親と教師が「子どもの勉強」のことで対立している間に、産業界の教育要求に強力にバック・アップされた国の教育政策は、確実に家庭教育、学校教育そし

て社会教育をも変質させ、それらを再編成しようとしている。われわれはこのような事実を冷静にうけとめなければならぬ。ところで、ここでP T A活動は社会教育の最も重要な活動の一つである、という公理を書きとめておくことにしよう。現在の管理体制の中で、校長、教頭は学級、学年レベルではP T Aを私たち機関としての父母会にすりかえ、一部のP T AホスはP T Aを学校P T Aとして父母の教育要求、学校への不満の統制、抑圧の機関に、しようとしている。いやすでにそうなつていゝ所も多い。「教育のことは先生におまかせします」と表面的には謙虚にならざるをえない大部分の親にとつては、教師こそがこのような矛盾と混乱、腐敗と虚偽を摘出してくれることを願っているようである。母親は、「先生方には労働組合があるのでしよう。そして教研集会も毎年熱心に進めていらつしやるのですね……」という。これは皮肉をこめていつているのではない。

若い父母も、若い教師もP T Aがどういふものかわからないことが多いのではないだろうか。もう一度P T Aの原則を思い出し、検討しなす必要があるのではないだろうか。

(和光大学)